

東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会記録

平成30年9月28日(金)午前9時59分～午前11時13分(9階908会議室)

○出席委員(11名)

委員長	高木 克尚	副委員長	尾形 武
委員	沢井 和宏	委員	二階堂 武文
委員	鈴木 正実	委員	根本 雅昭
委員	小松 良行	委員	村山 国子
委員	小野 京子	委員	山岸 清
委員	渡辺 敏彦		

○欠席委員(なし)

○議題

- 1 意見交換会について
- 2 その他

午前9時59分 開 議

(高木克尚委員長) ただいまから東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会を開会いたします。

議題は、お手元に配付の印刷物のとおりです。

初めに、ご報告させていただきます。

皆さんに取りまとめご苦労おかけしました、26日の9月定例会議でお諮りをし、了とした提言書について、オリンピック・パラリンピック教育に係る提言書を市長と教育長へ、副委員長と提出してまいりました。

1つ目の提言であります2020年までのオリンピック・パラリンピック教育について、道徳あるいは総合的な学習で生かせるよう、次年度から盛り込めるように指導していきたいという旨のお話がありました。

また、2つ目の提言である未来の子供たちへの教育については、2021年度からの次期福島市教育振興基本計画について、オリンピック・パラリンピックに伴う環境の変化などを捉えて策定したいとの話がありました。よくちょっと、意味深なところもあるのですが。

市長からは、10月から職員を増員して体制を強化することや、今後ボランティアの育成やレガシーとしての共生社会の取り組みなどを課題として認識をしていることを確認してきました。報道にあっ

た、ホストタウンの相手国の選手が出場する競技のチケットをホストタウン登録をしている自治体に優先的に振り分ける話が実際に来たら、前向きに検討したいといったことなどの話が市長からございました。

そのほかにも、古関裕而氏の曲を鼓笛や市内で活動しているマーチングバンドに演奏してもらうなどのアイデアを出されるなど、積極的に取り組もうとする姿勢が正副委員長は感じてまいりました。

以上、報告1点でございます。

それでは、議題の意見交換会について、議題といたします。

本日は、テーマについて協議をいただきたいと思いますが、正副委員長としまして、まずテーマについて2つ選定してはいかがかと、こういうふうに考えております。中学生、高校生にとっても初めてと思われる我々議員との意見交換会のために、どうしても最初は緊張あるいは遠慮などがあって、活発に意見を出せないのではないかと、意見を述べられない参加者が出てくるのではないかとという想定をさせていただきました。

そこで、意見交換を2つのテーマに分けて、まず1つは、気軽に中高生の率直なアイデアあるいは意見が出しやすい内容のテーマとして、そのテーマについて、グループごとに2つに分けてテーマとすることも想定しております。

2つのうち1つ目の気楽なテーマ、その場、この雰囲気になじんでいただきたいという思いから、より真剣に考える必要のあるテーマは全てのグループで共通のテーマ、2つのテーマのうち1つ目は2つのグループに分ける、2つ目のテーマについては全グループで1つのテーマについて考える、その中で意見交換から高校生の本音を聞き出してはいかがかと、正副委員長としてはこう考えさせていただきました。1つのテーマで順番に発表するのも手なのですが、せっかくグループ分けしますので、1つは共通で、1つはAとBのテーマに分けていただいて、アイスブレイクではないのですけれども、ちょっとなじみやすいテーマから入っていただいて、共通テーマに移っていただくと、こんな考えを正副委員長としては考えたのですが、皆さんからご意見をいただきたいと存じます。本音を言いますと、1つのテーマに絞り込むというのが非常に困難な作業であることが発覚しましたので、それでどうしてもやっぱりこちらが希望するかたい課題で意見交換会を設定しても、なかなか思うように話し合いができないのではないかとこの心配が非常について回ったものですから、そんなことから正副委員長としては2つに絞って、1つは楽なテーマでやっていただいて、後半は共通テーマで話し合いをしてもらおうと、こんな思いがあるのですが、いかがでしょうか。

(山岸 清委員) いいと思うのですが、高校生の人数と、あと、これ中学校、あそこ中高一貫校だから、中学生と高校生まぜて2つのテーマとするのですか。人数と、あとそのまぜ方というか。

(高木克尚委員長) 前にもお話し申し上げましたように、詳細については正副委員長と事務局で学校と詰める作業をしておりますので、具体的に何人という制限は現時点では持ち合わせていませんが、会場の都合もあって、1グループ例えば10人、11人、12人で5つ、6つぐらいのグループかなと、こ

んな思いは当初持っておりまして、学校側にもそのような方向性については話をしておりますが、まだ決定はしておりません。

(鈴木正実委員) グループ別テーマのパラリンピックの件なのですが、確かに重要なテーマになるというふうには思うのですけれども、福島市でかかわるかかわり方というのがパラリンピックは何かいささか不明のような気がするのですが、逆にこの野球、ソフトボール、あるいは都市ボランティアであるとか、競技ボランティアであるとか、そういうボランティアの中の一つとしてパラリンピックというか、障害者の案内として捉えるのだったら構わないのかなとは思っているのですが、そのところは何かボランティアという大きいくくりのほうがより考えやすいのではないかなと思うのですが、いかがですか。

(高木克尚委員長) 鈴木委員のご発言の中身について、テーマの中身についてはこれからもう一度皆さんにお諮りしていく段取りにはしていたのですが、ですからそのやり方として、共通テーマと2つに分けたテーマで当日実施するという考えはいかがでしょうか。

(鈴木正実委員) やるというやり方のことだけの話ですか。

(高木克尚委員長) まずは、ええ。共通テーマと個別テーマに分けて当日を迎えるという考え方にしたかったのですが、そこについてはいかがでしょうか。

(鈴木正実委員) 共通テーマとグループ別テーマというのは、もちろんこれはオーケーだと。要するに取っつきやすいところから入って行って、最終的には今回テーマとなっている復興五輪とは何だ、これが自分たちの将来にどういうふうにかかわっていくのだというような話になっていくことは、これは大変いいことだというふうに思います。この手法は、これでいいのかなという感じがします。

(高木克尚委員長) 共通テーマと個別テーマについては、もう一度皆さんにこれからお諮りしたいなと思うのですが。

(鈴木正実委員) そういうことだったのですね。

(高木克尚委員長) はい。この段取りとして、共通テーマと個別テーマに分ける方法で実施をしたいと、こんな思いなのですが、そのことについてのご意見をまずいただいてということになります。

(沢井和宏委員) この共通テーマもグループで議論するというで捉えていいのですね。グループのまま、そのまま、最初はグループ別のテーマでして、その次、時間を切って、共通のテーマということ。

(高木克尚委員長) 仮に6つのグループをつくったとすれば、個別テーマは、グループ別テーマは3つ、3つ、共通テーマは6つ全部一緒でということになります。考え方は。

(沢井和宏委員) わかりました。いいと思います。

(高木克尚委員長) では、テーマの設け方については、共通テーマとグループ別テーマに分けてやらせていただくと、こういうことで確認をさせていただきたいと思います。

そこで、まずはアイスブレイク的な意味合いもあるので、個別テーマ……個別テーマは後か。先に

共通テーマについて議題とさせていただきたいと思います。

正副委員長として、まずきょうご提起申し上げていたのは復興五輪、これはもともと当委員会がスタートする際にも課題の一つに挙げていたテーマでありますので、復興五輪について共通のテーマにしていきたい。ただ、高校生の皆さん、あるいは中学生の皆さんとのかかわりの場面になるものですから、キャッチコピーも皆さんからもっといいアイデアをいただければいいと思うのですが、まず正副委員長として考えたのは、タイトルとして、復興オリンピックってなんだ、こういう題名にさせていただきました。趣旨とすれば、今申し上げましたように、当委員会で最初に行った調査すべき項目のまとめの中心に据えさせていただいておりますし、復興オリンピックについて中学生、高校生の本音を聞きたいと、こういう趣旨であります。

9月定例会議で皆様にお諮りをし、了解をいただいた委員長報告にも盛り込んだとおり、2020年のオリンピック・パラリンピックにおいて本市で野球、ソフトボールが開催されるということは、大震災あるいは原発事故からこれまでの支援に対する感謝の気持ちと、前に進む本市の魅力を全世界に伝える最大の機会であるというふうに述べてきました。

しかし、今の子供たちにとって実際どう考えているのかなど、世界に対して感謝すべき、あるいは受けた支援を知っているのか、何をどう伝えたいと思うのか、こんなことを委員会の中でも触れた、例えば開発途上国からも支援を受けた事例、こんなことも踏まえながら、子供たちの震災からの復興に対する認識や思いなど、これらについてぜひ聞いてみたいなど、そう考えまして、共通のテーマとしたいと思いました。本当に我々が思うほど中高生の皆さんの意識がそこまで行っているのかどうかというのも全然僕らは想像もつかないので、まずそこから入ったらどうかなということ共通のテーマとして、復興オリンピックって何だ、素直に聞いてみたいなど、こんな思いで共通テーマを今ほど申し上げました復興オリンピックってなんだ？ということにしたらいかがかということで正副委員長案として皆さんにお諮りしたいと思うのですが、ご意見を賜りたいと思います。

(小松良行委員) やっぱ今危惧されるように、子供たちが、これまでの復旧復興に全国民、また海外からもさまざまな支援の手が差し伸べられていた現況については、ほぼほぼ当時、今から7年前となりますと、高校生だと幾つだったのかなと考えれば、非常に難しいと思われま。やはり前提となる情報提供は事前におこななければならないなど。特にそうした国内外からどういった支援があって、そして災害時、福島市がこうむった、県土全体でもいいですけども、被害の状況やその復興の道筋などもダイジェストとしてペーパーのようなものであらかじめやはり周知しておくことは必要なのではないかと。その上に立って、今復興五輪って何だということであれば、腑に落ちてくるような気がするのですが、いかがでしょうか。

あとは、一部の市議については、ベラルーシ、ウクライナ両国に対する放射線対策研修ですか、視察にも行ってまいりましたし、そうしたところからもたくさんの心温まる言葉や、あるいは今現在も交流が県内でいろんな子供たちと進められている実態だにご紹介したらいいのかななんて思ったりし

ました。

(高木克尚委員長) 実は以前に正副委員長、事務局とお話しさせていただいたときも、今まさに小松委員言ったように、何も情報わからないのではないかと、どんな支援を受けたかさえもわからないのではないかと、やっぱりそういう支援の内容、受けた支援の内容とか、当時の資料等を掘り起こして、事前に学校側に提供すべきではないかということは正副委員長と協議をさせていただいております。

(村山国子委員) 高校2年生というと、原発事故と震災があったのは小学校2年生なのです。中学2年生だと年長さんという年齢の中で、今小松さんが言ったみたいに、やっぱり全くわからない状況だと思うのです。私らは、改めてというのがありますけれども、そういう子供たちにとっては初めてのことでないかなというふうに思うのです。だから、すごく重要なテーマかなというふうに思いました。いいと思います。

(沢井和宏委員) 今あったように、当時小学校2年生ということは、本当に遊びたい盛りに、例えば私も現場にいたのですけれども、本当に1学期は外で遊べないし、窓はあけられないし、学校の中すごい状況だったのです、子供たちのストレスも。だから、ここの復興五輪って何だというのはいいのですけれども、その下に小さいテーマとして、まず導入として、例えば当時の記憶なり、全員に話させることはないと思うのですけれども、誰かに、当時どういう生活をしていたかというようなことをしゃべってもらったりなんかすると、イメージとして、ひどい状況だったのだなというのがわかるかななんて思うのですけれども。

(高木克尚委員長) それも最初に正副委員長2人で非常に心配したのは、当時の若い年齢のときのことを思い出させていいかどうかという、その不安もあったのですが、これだけ年月たてば、それなりの学校のフォローがあって育ってきたのですから、決してそこは学校も思い起こさせることを反対することはないだろうと。ただ、最終的には学校側に相談申し上げて、嫌な記憶をよみがえらせることも、もしかするとあり得ますが、どうでしょうということは事前に学校側とちょっと協議をさせていただかなければならないなと。学校側でも、いや、もう平気ですよということであれば、きちんと当時の資料を配付しながら子供たちに記憶をたどっていただきたい、それも一つの手かなということは考えてはおりますが、現時点ではそこまではっきりと、その方向でいきましょうということまでちょっといけないというのもわかっていただければというふうに思います。

(沢井和宏委員) もちろん学校側のあれですけれども。ただ、7年過ぎて、多分子供たちももう高校生となると、ある程度客観的に、冷静に振り返られるのかななんていう気はしました。

(高木克尚委員長) その辺の意見も聞いてみたいですしけれども。

(根本雅昭委員) この復興五輪ということのテーマはすばらしいことだと思うのですけれども、その一方で、当時を振り返って、こちらから子供たちに教える場だけにならないかなというのもちょっと心配しております、この調査事項も、2つの調査項目、子供たちの夢や希望につなげるということと、あと持続可能な発展につなげると、そのオリンピックが終わってからどうしたらいいのかという

ことを子供たちが、まだまだ長い未来ありますので、どういうふうを考えているのかという子供たちの意見を聞けるようなタイトルだと、もう少しいいのかなというふうに思います。オリンピックを通して復興するという、そのことについて子供たちがどう思っているのか。私たちから当時はこうであらうということではなくて、事前の提供も余りし過ぎずに、子供たちが素直に今現在持っている感想を、具体的な手法や何かも含めて、聞き出せたらいいのかなというふうに1つ思います。

(高木克尚委員長) 我々の今回の提言の中に、オリンピック以降も、オリンピック当日からオリンピック以降も、世界から受けた支援というものに感謝しましょうよと、こんな提言内容が入っているものですから、では何に感謝したらいいのだかと、もしかすると子供たちわからないのではないかというのがこのテーマの選択の一つだったもので、根本委員がおっしゃられるように当日、本番の際にいろいろ子供たちにそれを伝えたらその時間が足りなくなるので、ある程度聞きたい意見があって、その背景には当時つらい環境の中で世界中からこんな支援を受けたのですという情報は事前に与えておいたほうが当日を迎えやすいのではないかということも考えておりますので、ご理解いただきたいと思います。

(根本雅昭委員) はい、大丈夫です。もちろん。

(高木克尚委員長) 本当に我々大人が想像するのとはまるっきり次元が違う考えを持っているのかなと思うと、復興という概念そのものも、もしかすると我々が思っているほど思っていないのかなとか、とにかく本音を聞きたいということで。

(鈴木正実委員) 今委員長言ったことが私もずっと考えていることで、要するに子供たちにとってはもう復興になっている今現在からしか世の中を見ていないわけで、復興、今までつらいところから復興したというのは一つの歩みなのですけれども、そこに余りこだわらずに、結局そこから先どういうふうに世界にこの福島を発信するのだ、あるいはその感謝と言ったときに、感謝、何に対して感謝だとおっしゃったとおりで、何をどうすればその感謝を具現化できるのかとか、あるいは今回五輪を開催したことによってあなたたちの将来何が自分にとってできるのかとか、何かそういうテーマのほうに重きを置く、過去の事例云々ではなく、やっぱりここから先、子供たちがどういうふうにこれを捉えていくのかという、そこをもうちょっと重点的にお聞きするほうがいいのかなという感じがするのですけれども。

(高木克尚委員長) やっぱりちょっと私の語り方が順番逆のほうがよかったかな。個別テーマから先に入ったほうが、もしかするとよかったのかもしれない。もっと単純な子供たちの本音を聞いた上で共通テーマに入ったほうがいいのだろうということをもっと最初申し上げましたように、もっとざっくりばらんな入り方として個別テーマ、グループ別テーマにしたかったので、その上で後半が共通テーマというスタンスとして、その後半から今皆さんにお話ししてしまったから、ちょっとちゅうちょするのかなと思うのですけれども。どうするかな。グループ別のほうがもっとざっくり緩いテーマにちょっと考えていたのですけれども、その後肝心の復興オリンピック迎える、復興オリンピックのその後と

いう姿を子供たちにしゃべっていただきたいというのが鈴木委員の思いなのだろうと私も思うのですけれども。

(村山国子委員) 過去があって、今があって、未来があるのだから、いいと思います。

(高木克尚委員長) 済みません。段取りもあるので、共通テーマでまず集中してやります。

(二階堂武文委員) 私も根本さんと今鈴木委員のお話伺ってしまして、ちょっとやっぱり、委員長、副委員長の段取りということもあると、私も最初からやっぱりちょっと自分の中でひっかかっていたものでもあるのですが、お二人の話ちょっと伺ってしまして、私どもが集まって、多分、やはり高校生の視点から立てば、皆さんが話しやすく、徐々にこちらの投げかけた復興五輪とか何かにどんどん関心を深めていけるような持っていき方を考えたときに、やっぱり話のスタートというのは高校生とか中学生の今の状況からのスタートなのでしょう。ただ、復興五輪ってすごくテーマが大きいですよ。一つ間違うと、ではそれに合わせて資料をちょっと、選ばれた選抜チームが資料をちょっとあさって準備をすると、それはそれもありだと思うのですが、ただ私は参加していただいた皆様に、今の高校生なり中学生の参加した人たちの今の生活が、私どもとかかわったことによって、視点がさらに深まるとか、オリンピックを迎える気持ちとか、そういうのが私どもと接触することによってまた深化するような持っていき方を考えた場合、私は一番危惧しているのは、やはりこの場が一般論で終わってしまうということに対して、それを一番、それは危惧すべきことではないのかもしれませんが、私せつかくこれだけのエネルギーと費用とか時間を使いながらやることを意義あるものに少しでもしたい、皆さん一緒だと思うのですけれども、私なりに思うと、やはり高校生の今と私どもが望むもの、ここから始まって、望むものを考えたときに、それを一般論で終わらせないためには、やはり高校生の今が、私どもがこの議論を深めていくために大事なものは、高校生の今、どういった高校生を切り取るかと、高校生の今を切り取るかがこの話を深めていくためにはすごく大事なのではないかな。それは、ちょっと一部戻るところもあるかと思いますが、やはり今の高校生、例えばボランティア活動とか、障害者向けのボランティア活動で頑張っている子たちとか、スポーツで活躍している子供たちであったり、日本文化について深くかかわっている子供たちであったり、これは視察で訪れた東京都教育委員会の5つのテーマに沿って、あと豊かな国際感覚、こういうのを教育のテーマとして掲げていたわけですが、実際私成蹊の高校生、中学生の中でそういったものと障害者とかかわっている高校生、いろんなことを、やっぱり一般の高校生よりも突っ込んだ形で体験したり、考えている部分はあるかと思います。そういった子供たちと、この復興五輪を絡めて話し合いをしたときに、彼らの今後の学生生活もまた視点が一步深まるのではないかというか、一般論で終わらない、何らかのやはり彼らの、中高生の意識の覚醒とか何かというのは、これをきっかけに起こるのではないかというのをすごく期待しているところはあります。そういった持っていき方であれば、話の進行とか何かというのは意外とやりやすいというか、安定してくるのではないかなという気もするのです。議事進行というか、考えますと。今から始まって、ただその始まる今、ではそこにどんな学生の今を

取り込んでこの話し合いの場に集結させるのかというのが意外とこれを成功に導くためのポイントはやっぱりそこにあるような気はするのです。

(小松良行委員) だって、今のことと、そしてレガシー、その後のことということで、どこから入ったらいいのかな。

(村山国子委員) でも、入るのは最初、共通は後ですものね。最初はグループ別のテーマから入っていくのですものね。現在のところから。

(高木克尚委員長) 後先になって申しわけないけれども、お手元の資料にあるように、グループ別テーマ、こんなフレーズでどうかということで2つほど挙げさせていただいております。本当に素の考え方を聞きたい。今二階堂委員がおっしゃったような導き方まで考慮しなかった反省はしますが、まずこのタイトルから入っていかないと、高校生って何か興味持ってもらえないのかなと、そんな思いがあってこの2つのキャッチフレーズにしたのです。本当に福島でオリンピックやるけれども、行きたいのかどうかというのわからない。でも、見たい、どうしたら見られるのか、もっと単純なところからまず入って、我々がテーマとして掲げている最終的な復興オリンピックの議題に結びつけていきたいという配慮もあったものですから、今二階堂委員からおっしゃられたように、私どもの皆さんにお諮りする仕方がちょっと逆だったかなという反省はしておりますが、ではどう今の高校生を切り取る課題を皆さんでここで共有できるのかどうか、その方法について皆さんに逆にお聞きしたいのですけれども。

(村山国子委員) ちょっと前まで高校生だった息子がいるのですが、例えばうちの息子の場合なんかだと、サッカーをやっているので、自分と関係のあるサッカーだったらば多分、オリンピック、サッカーやるよなんかいうのだったらば、もう目の色変わっていると思うのです。やっぱり何かのつながりがあれば高校生としても関心を示してくるのかなというふうに思うのですが、そこがやっぱりどうやって関心を示させるかということなのかななんて思うのですが、今の若い人って自分と関係ないと本当になかなか関心を示してくれないというのがあるので、そこがキーポイントかなというふうに思います。

(高木克尚委員長) グループ別テーマの中に、あえてパラリンピックという表現をさせていただきました。これ成蹊高校という特色も少し加味したのです。市内で有数のやっぱり社会福祉活動が盛んな高校なのです、歴史的に。そんなことがあって、最初にその奉仕活動の延長線、パラリンピックの概念であるのかなという気持ち、思ったもので、最初にグループ別の中でパラリンピックも入れさせていただきました。ただ、二階堂委員から言わせれば絞り込み過ぎなのかなという思いもあるのですけれども。

(二階堂武文委員) 初めての試みで、多分、私どもも今苦勞していますけれども、ただこの結果については、参加した高校生、中学生の皆さん並びに新聞等の報道を通じて同世代の皆さんに対してもいろんな波及効果が生み出せるのかなと思ったときに、パネルディスカッションでも何でもそうですけ

れども、中身が濃いものになるか、それとも平面的な、出だしの一般論で終始してしまうかということろって人次第でやっぱりもう当然変わってまいりますので、そういった意味では、今お話あったように、高校生の中でも、ボランティア活動であったり、スポーツであったり、日本文化とか、国際感覚の、意外と、成蹊高校においてはトップで頑張っている子供たちとか、部活とかで、そういった子供たちにこのオリパラというきっかけをぶつけることによって、彼らの見方、今後の生き方がすごく成長していくのではないかなというか、それこそ本当に遺産として参加した子供たちにも残っていくだろうし、多分彼らって意外と市内に高校生のそういったサークルとか何かのつながりがあったりなんかもして、そういった中でまた話題の広がり、それは赤十字活動なのか、障害者のボランティアグループのサークルの連盟組織なのか、何かわかりませんが、ただ、そういったところに一石を投じる一つのきっかけになってくれれば、やっぱり広がりがまた違ってくるかなみたいなのは、何かちょっと期待するものがあるものですから。その辺ですね。

(高木克尚委員長) 私は、二階堂委員のお考えと正副委員長の考え方で大きな差を今感じたのですけれども、我々とすればノーマルな高校生の立場で意見を聞きたいというのが頭にあったもので、やっぱり二階堂委員がおっしゃるような成果をどう求めるかということになると、お話聞いていると、特技とか特徴とかに秀でる方を集めないと聞けなくなっていくのかな、そんな思いになってしまうのですけれども、いかがですか。

(二階堂武文委員) 確かに私にしてみれば、私どもがこれだけ労力とエネルギーかけてやっているからには、成蹊高校のかかわった皆様含め、成蹊高校の生徒含め、同世代の高校生、中学生、市内に生活していらっしゃる、皆さんにもやっぱり響いてほしいというか、響くような一つのきっかけとしての意見の交換の場でありたいという気持ちがあるものですから、そういったときに、決して特殊なことではなくて、あくまで私も成蹊高校という形で今回対象を選ばせていただきましたけれども、実はその背景には市内の中高生がいるのだというような見方で、ただ今回初めての試みで、何とか接点をつくれたのは成蹊高校なのですけれども、ですからそこでボランティアサークルで頑張っている人とか、スポーツで頑張っている人とか、それは1人、2人というレベルではないですが、そういった中でうまく参加していただける方がいらっしゃれば、それは野球チームなのか、ソフトチームなのかわかりませんが、赤十字活動をやっている子供たちの中で、ではそこで四、五人ぐらい、チームに1人ぐらいはボランティアの人入ってくださいよと、6班の中にと、スポーツで頑張っている人も1人、2人入ってくださいよみたいな形で、各班のチーム構成あったときに。高校生は話せると思うのです、今を。今の自分たちのやってきたことを、国際交流であったり、ボランティア活動であったり、今を話すことができ、そういった中で、話しながら、私どもの提供する資料であったり、議員が提供する話と、それに触発されて、また高校生の意識が変わっていくきっかけにもなるだろうし、そういった話というのは、それ以外の方が新聞報道とか何かで見たときに、また響くものが、ちょっと深みが出てくるのではないかなという気がちょこっとするものですから。

(高木克尚委員長) きょうはテーマをある程度固定した上で、今後成蹊高校と、どういう人材を、高校生、中学生の人材をどう参加させていただくかというのはこれからの交渉になってきますので、今皆さんにお諮りする岐路に立たれているのは、もともと正副委員長がやりたかったノーマルな子供たちの意見を聞くという場面にする方法と、今二階堂委員がおっしゃるように、この先、せっかくやった高校生との意見交換会ですから、市内同世代に響くような結果を残したいという、やはりそれなりに秀でた高校生をそこに参加をさせるという方法、今2通り議論になっているのですけれども、そのことについてもぜひ皆さんから意見をいただいて、その上でもう少しテーマを絞り込んでいかなければならないのかなと思うのです。

(村山国子委員) やっぱり秀でた人というのは、何もやらなくても自分からどんどん行くと思うのです。普通の高校生の考えを聞いて、やっぱり普通の高校生が変わっていく、意識づけがされていくというか、そっちのほうが、何か成果を前に持ってきて議論するのではなくて、やっぱり普通の高校生との会話が今重要なのではないかなというふうには思います。

(高木克尚委員長) 何回も申し上げますように、たまたま正副委員長案としてのテーマ、キャッチフレーズなので、これにきょう決めるわけでも何でもなくて、皆さんからテーマを聞く場面でありますから、どういう形の高校生、中学生を参集させるかということにテーマはかかわってきますから、ぜひ率直にご意見を述べていただきたいのです。

(小野京子委員) 成蹊高校ということで、私の母校を選んでいただいてありがとうございます。成蹊は中高一貫ということで初めてで、学校自体もやっぱり公教育とか、あとほかの子供たちのスポーツ面とかいろんな面でやっている学校ではあるのですけれども、委員長が今ずっと言われていたように、多くの一般的な高校生の声というのがやっぱり一番大事だと思うので、二階堂委員も言われたのですけれども、そういう普通の子供であっても、運動していても、していなくても、スポーツのこととかボランティアということは考えていると思うので、やっぱりそういうものをざっくばらんに聞いて、それでオリパラ、福島でやるのはよかったなというのは誰でも、高校生も、私らも思っていますから、よかったなという思いは高校生でも誰でも持っていると思うのです。それを自分たちが今後生かせるのかということを考えさせてもらえるということは、こういう機会はすごくいいものでありますし、あと一般の高校生にも、そういうものをやったという声を公表することによって、高校生もその思いを受けることもできるので、やっぱり一般的な高校生の思いを、オリパラが開催できる喜びと、あと今後の将来に向けた希望をみんなで話し合うということはいいと思うので、この内容でいいと思います。

(渡辺敏彦委員) 特別委員会の調査でありますから、しっかり子供たちの意見を聞く、調査をするということだから、結局これ意見交換会やったものを周りに広げてどうこうなんていう話ではないね、多分。それを結果を今度踏まえて我々が公表すればいい話だから。共通テーマの中で、ここに書かれていて、当たり前なのだけれども、復興が進んだ福島の姿を世界にどう発信するかと書かれているの

だから、これ十分いいと思うのよね、これで。子供らも温度差はあると思うのだけれども、復興に対する意識というのはそれぞれ持っていると思うのね。ただ、普通に生活していると、小学生とか中学生のころに原発とか何かあったというの、大人は意識持っているのだけれども、子供は余り持っていないのかもしれないのよ、普通に生活していると。最初のうちはマスクしたりしたから、そういう意識はあったのかもしれないけれども、最近そういうのが希薄になっている部分はあるのね。だから、ただそういった思いがあるから、復興に対する意識はあると思うの。これからどうするのだといったときに、このオリパラをどう生かして、ここに書かれているとおりの、復興が進んだ福島の姿を世界に発信するかなのだよ、多分。だから、この下に今度感謝する云々と書かれているのだけれども、我々も含めて、世界中からどういった支援をいただいたかなんていうのは、たまたま、例えば松川の駅前にあずまやつくったのだけれども、あれどこかの外国からもらった復興予算で建てたとか、そういうのでわかるのだけれども、何具体的に支援受けたって大人もわからないのだ、多分。だから、それはこっちで提示をして、オリパラを福島の宣伝のためにどう使うか、あとこういう支援を受けたのだけれども、この支援の恩返しってどうすればいいのでしょうかと一般の子供に聞くことだと思うのです。だから、ちょっとこれ、例えば支援内容がどうのこうのという話になってくると、子供はわからないから、こっちからある程度提示をして、多分世界、あちこちからいろんなもらっているのだ、金もらったの、人來たのって、そういった部分についてはこっちから教えないと、多分子供らはわからないと思う。それに対する恩返しは、その後の問題として、とりあえずこの復興の進んだ福島、あるいは日本をどう外国に発信するか、それを基本に考えればいいと思うのだ。この委員会も、俺はIT弱者なのだけれども、IT強者の根本君いるでしょう。子供らは、いろんな媒体使う中でいろんなことをやっていると思うな。我々と違う感覚を持っていると思うから、そういういろんな話を聞いて、これはインターネットで回せば、世界中、福島元気だよとわかるでしょうと。我々テレビとか写真しか意識ないものだから。だから、そういう新たな子供たちの発想の中での発信の仕方というのを聞くのもいいのかなと思うから、テーマとしてはこのままでいいと思う。あと、これを深めていくのは、進める人の技術かな。これを進める。そういうようなことで、そんな難しいことではないのです。いろんな子供らを集めていろんな話を聞いて、その中から我々が特別委員会の中で、こういう意見があったよねと、大人としてこういうことをやりたいなという答えが出てくればいいのだらうと思います。

(山岸 清委員) 私もこれでいいと思うのだけれども、実際成蹊の生徒をおそらくチョイスするわけだ、選ぶわけだ、先生のほうで。あと、やっぱりこれだけやれば、成蹊にすれば決して悪い宣伝ではないのだから。そうすると、そのときみんな黙っていたのではだめだから、先生、模範回答言うのだ。自発的にやってもらえばこれは一番いいのだけれども、大体ある程度いろんな資料を見せたりなんだからして、あとそれについてどう考えるは自分で考えろと言ってくれればいいけれども、大体こういう考え方もあるななんて先生が大体模範回答は、あなたはこうしゃべれ、あなたはこうしゃべれ、そこ

まではないだろうけれども。

(高木克尚委員長) 事前に成蹊高校の教頭先生と雑談させてもらったときに、優秀な子供たくさんいます、まあそうでしょうねと。何が優秀かという、今の子供たちは余り臆することがなくて、しゃべり始まったらとまらないのだという子供が結構多いのですよというお話はしていました。

(山岸 清委員) では、いいね。

(高木克尚委員長) 逆に、とまらないぐらいしゃべられるのもちょっと不安は不安なのだけれども。

(小松良行委員) こういう想定で進めていくことに何ら異議もありませんし、そもそもの目的は子供たちの夢や希望につなげるための意見交換ということで私どもが調査をするわけですから、その目的についてはそれで十分だというふうに。ただ、広がりという点を期待するのであれば、対象となる中高生、主に高校生のほうなのでしょうか、中学生よりは。より具体的にというか、我々に、大人に近いといったところでは活動する力も範囲も大きくなりますので、向けに、アンケートではないのですけれども、こういうソフトボール、野球が開催されることについての思いや期待といったものを聴取する、あと自分たちがオリンピック・パラリンピックを支援する、応援するため、盛り上げていく、どういったかわり方があるのかといったことを事前に調査を試みる。当然この成蹊高校での意見交換会に際しては、それらの調査を発表しながら、広く若い高校生たちはこのような考え、思いを持っていますねということで、そこにアンケートで参加した人たちもこの調査に自身も参画しているような意識には当然なると思いますし、このグループ別テーマや共通テーマに対するどういった高校生たちの意見が集約されたのだろうというようなところは関心を持って今後見てくれると思うので、あくまでもこういった想定の中ではありますが、少しそうしたあらかじめオリンピック・パラリンピックに向けた子供たちの意識というものを、まだ時間があるので、若干その情報収集という意味から、データ、アンケートなどをとることも、今後につながっていく、また当日この調査特別委員会の報告などが非常に関心を持って見ていただけるのかなというような感じを、二階堂さんの話を聞いて、ちょっと思ったと。

(沢井和宏委員) やっぱり大事なのは、高校生が何で私たちに声かけられたのだろうという、こっち側の、テーマとかはあるのですけれども、目的をしっかりと高校生に伝えることなのだろうと思うのです。多分学校側で子供たちに募集するときいろいろなチラシとか何かつくってとか、配布するのだからかもしれないですけども、その中にやはり議会として、今回オリパラを迎えるにあたって、こういうふうに盛り上げたい、そして若い世代の意見を聞きたいという、そういう目的をはっきり入れて出せばいいのかな。その中でやっぱり若い世代、自分ならこうしたい、自分はこう思うという、今の若い人たちの主体的な考えをお聞かせ願いたいという、そこをやっぱりしっかりアピールしていかないとならないのかな。そうすると、投げかけられた高校生は、自分はどうか、これに対してどうかなという、そういう思いをめぐらせたのが意見として出てくればいいのかとは思います。

(高木克尚委員長) 手法について議論がだんだん、だんだん深まりつつあって、きょうはどこにおさ

めるかというところなのですけれども、手法はいろいろお考えがあるので、それはこれから皆さんと練習を積み重ねながら、最終的なおさめどころ、今の高校生はこういうことを思っているのだということ、これを導くためのタイトルとして、このテーマはいかがでしょうか。

(根本雅昭委員) 内容はいいと思うのですけれども、もし私だったら、例えばパラリンピックを盛り上げようという部分を、盛り上げようパラリンピックとか、ををとして、同じなのですけれども、ちょっと印象として、観戦したい、野球、ソフトボールとか、をがちょっと余計かなと、文章みたいになってしまうので、もうちょっとわかりやすく。

(高木克尚委員長) 大変ありがとうございます。まず、私の、先ほど述べたように、語り方の順番が変なのかもしれませんが、まずこの共通テーマをここに据えて、個別テーマでそういう意見、あるいはもうこれ以外のもっと違うことを個別でもやったほうがいいのではないかとこの後聞いたかったのですけれども、どうでしょうか。

(鈴木正実委員) さっき言いましたけれども、このパラリンピックという言葉に絞っていくことの意義というのが、タイトルで、テーマで。

(高木克尚委員長) それテーマ別の。

(鈴木正実委員) テーマ別の。

(小松良行委員) まず、共通テーマでしょう。

(村山国子委員) 後で。

(鈴木正実委員) 今共通テーマ。

(高木克尚委員長) 今一緒になっているのです。

(鈴木正実委員) ごちゃごちゃになっていて、どれに対して意見を言っているのかわからないのだけれども。

(高木克尚委員長) やっぱりメインは共通テーマなので、個別テーマをどう組み立てるかというのは後ほど皆さんにアイデアをいただきたいのですが、行き着くところ、共通テーマの、この求める、復興オリンピックってなんだ？というこのキャッチコピーで、これから中身を構築していきたいのですけれども。どんな結論になるかというのは、何ともこれ。お話し合いしてみないとわからないのですけれども。

(鈴木正実委員) 共通テーマだけで申し上げれば、大人の言葉ですけれども、これしかないのかという感じはするのですが。子供たちが、さっき言いましたけれども、本当に復興だと思っているかどうかというのはまた別の問題になってしまうので、大人のタイトルのつけ方としてはこのままでいいのかという感じがします。

(高木克尚委員長) 導く方向性とフレーズについては、皆さんがそれぞれグループの中で導きをしていかなければならないので、もっといいフレーズがあったり、ぜひ言っていただきたいのですけれども。導く方向性は、もしかするとグループごとで違うかもしれないですね。それはそれでしようがない

いですよ、これからやることですから。

(沢井和宏委員) 最初見たときに、ううん、どうかなと、このなんだ?というのは、すごく否定的な部分を含んでいる感じがしたので、最初はどうかかなと思っていたのですけれども、かえって結局復興五輪って名前をつけたのは大人だ、それは中央のほうが、福島が、そういう意見はあったのでしようけれども、中央がつけた。そういうことに対して、ある程度こういう否定的な意味合いが入っていたほうが子供はちょっと別な角度から見てくれるかなというので、かえっていいかななんて思います。

(高木克尚委員長) 共通テーマの大枠として、子供たちに、我々が委員長報告、提言書で述べたように、感謝の気持ちってどう、どこまで子供たちは持っているのかということを引き出すためには、この復興オリンピックってなんだ?というタイトルを共通テーマにさせていただきたいのですが、よろしいですか。

【「異議なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) ありがとうございます。

その共通テーマをどう料理していくかは手法の問題になりますので、この先、後々皆さんと一緒に話し合いをさせていただいて、訓練をしていきたいなど、こんな思いがあります。

2つ目のグループ別でのテーマについて、ぜひ皆さんにお諮りをさせていただきたいのは、先ほど述べたように、とりあえずきょう正副委員長案として2つ、これから述べさせていただきます。

先に、共通テーマより先にグループ別、Aグループ、Bグループに分けてやりたい。これは、雰囲気や和ませる意味もあって、気軽に話の出る、わかりやすいテーマをまず先に設定をさせていただきたいということで、正副委員長としては、1つは野球、ソフトボールを観戦したいのか。本当に中高生が野球、ソフトが福島で開催されるということを知ってはいるけれども、実際野球、ソフトに興味あるのかどうか。私の身近な話で申しわけないですが、ルールもわからず、何で野球はファーストに走るのだと、そのぐらいルールをわからない人からすると、野球、ソフトが福島であっても何も興味示していただけないのかなという不安があります。本当にこの野球、ソフトを見に行きたいのかというテーマ。

もう一つは、後々、当委員会が重要な課題としておりますパラリンピックについてであります、どれだけこのパラリンピック、広く言えば障害者に対する対応について興味とか関心があるのかどうか、それを引き出すために、パラリンピックと障害者スポーツに興味を持ってもらえるのか、持つてもらうためのアイデアは何なのかとかいうことを引き出したい中身に、とりあえずパラリンピックを盛り上げようという、福島市で開催されるものとは全然次元が違いますけれども、そういったテーマもありかなと。この2つのテーマでいかがですかということ、とりあえず正副委員長案として皆様にお諮りをしたいと思っていますのですが。

きょう皆さんお手元に新聞記事がありますように、ソフトボールの試合数が多くなるという報道が

ございました。我々としても、実行委員会としても、少しでも多くの若者に実際に競技を見て感動してもらいたい、そのためには中学生、高校生にどう興味、関心を持っていただけるのかということを知りたいというのがありました。

パラリンピックに関しても、本市で競技開催ではないのですが、やはりオリンピック・パラリンピック全体のレガシーとして、障害者スポーツを通して障害がある方への理解を深めることが重要なのだよということを多くの若者の皆さんに興味あるいは関心を持ってもらいたい、その方法について何かありませんかということで選ばせていただきましたので、決してこの2つのテーマにこだわる必要はないのですが、後々共通テーマに持っていく上で、前段のテーマとしてのあり方について、皆さんからご意見をいただければと存じます。

(小松良行委員) 大きくこの大別して2つのテーマに絞っているということでは非常に賛成であります。2番目にパラリンピックを盛り上げようということで特出ししてしまうと、パラリンピックはこっちは競技がないわけですから、オリンピック・パラリンピックを盛り上げようでいいのだろうなというふうに思います。特にこのグループ別になったときの上段の部分、観戦したいかと、したい! ? ということの問いかけですけれども、要はこちらは競技スポーツに対する関心のみならず、参加するチームや参加している人たちの技術、そしてそれぞれの努力、あるいはチームスポーツというものの魅力というのですか、そうした教育的に非常に若い人たちにそのことが、人生訓というわけではないですが、教育に大きく寄与できる、また生涯を通じてスポーツに参加する、あるいはこういった競技を通じて人、人間性とか生きざまというようなものも感じていただけるというふうなことの導入の仕方に取り組んでいただければ非常にいいであろうし、一方このオリンピック・パラリンピックを盛り上げていこうという部分については、さまざまな競技に対する理解や、あるいは生涯スポーツというものの理解、関心というものを高めていく目的でということと、もう一つ、この2つの項目の中になのが、やっぱり参画意識というふうなものであろうというふうに思っております、ぜひこの盛り上げようのほうに、あなたたちならどういった参加の仕方があるのか、自分たちが盛り上げていくためにどんな協力ができるかといった点もこちらに加えていただければということです。今感じるところは、この2つでいいと、しかしながら、どうしてもソフトボール、野球を観戦したいですか、興味ありますかというふうな問いだと、先ほど言ったように、私は野球やソフトは関心ありませんという人にとってみれば、何ら打っても響かないと。しかし、競技スポーツ、特にチームスポーツというふうなものがなぜ人を魅了するのかと、関心のある人にとっては、やっぱりそういったところの掘り下げ方というのも今後テーマを投げかけるにあたっては必要なのかなと思う点と、オリンピック・パラリンピックを盛り上げようというふうにしたほうが、何かパラリンピックだけ取ってつけたようになってしまうので、参画、参加するといったところにもう少し、二重、2つのテーマになってしまうかもしれないけれども、米印が2つになってしまうかもしれませんが、私たちはどう参加できるか、あるいは協力できるかといったことも盛り込めればいいかなというふうに感じました。

以上です。

(高木克尚委員長) ぜひ2つにこだわらず、視点を変えて、アイスブレイク的なテーマをご発言いただいても結構です。

(二階堂武文委員) 今小松委員おっしゃったところで、私も、ただちょっと違うのは、このサブテーマ、グループ別テーマ、共通テーマも事前に学校側にはお知らせすることになりますか。であるならば、なおさらなのかもしれませんが、野球、ソフトボールを観戦したいというよりも、最初のサブテーマとしての投げかけは、やっぱりオリンピックを見たいというか、観戦したいという投げかけで、野球、ソフトの好き嫌いで、そこでストップしてしまうようになってしまうと、話がつながらなくなるでしょうし、多分にサブテーマも事前に知らせているのであれば、その辺の向こうでふるいにかけた上で人選を考えてくれるのかもしれませんが。

【「人選という言葉が何かわかんないんだけど」と呼ぶ者あり】

(二階堂武文委員) ごめんなさい。では、その点で言えば、私ってこういうのを企画するときは、報道するときのキャッチコピーとかレイアウトまで出てしまうのです。このキャッチコピーで最終的に報道したいなというか、伝えたいなみたいな。

【「だから、我々ついていけなくなるんだよ」と呼ぶ者あり】

(二階堂武文委員) 結果から入ってしまうのです。事実が終わった後の結果から頭が、思考回路が出てくるものですから、済みません。それはおいておいて。ということで、オリンピックを観戦したいみたいな投げかけの中で、その中で福島では野球、ソフトが開催されるのだよねというような持っていき方で、今回市長さんの話、新聞報道にもありましたように、ホストタウン絡みで私どもスイス応援しているので、スイスの観戦枠あるかどうかわかりませんが、何か優先的に福島市に振り分けられるとか、いろんな話もありますし、東京も近いですから、本当に一生に、多分今の、私どもにとってみればもう後先オリンピック、こういうのはないのかもしれませんが、そういった広い投げかけでサブテーマの設定もいいのかなというふうにはちょっと思いました。

(渡辺敏彦委員) 少しでも多くの若者に実際に競技を見てもらうというのだけれども、子供らってどのくらい見られるのかなと。大人だって見られないのに、観戦したいですかというのなら、券何とかなるのですかと子供らに聞かれたときに、早く行って買うとか何かするしかないのでしょうかという話で終わってしまうのでないかと思うのだ。だから、さっき小松君言ったように、競技に対する云々とかという話だといいいのだけれども、だから団体競技がどうのこうのなんて。観戦したいといったら、いや、観戦したいけれども、券買えるのかという具体的な話になってしまったときに、これどうなるのかなと思うのだよ。だから、これ微妙だなと思ったのだけれども。福島でやっているのだから、興味持ってテレビで見てくださいただたらわかるのだけれども、実際そこに行ってみるとなったら、これ。だから、子供ら単純に見てみたいのだけれども、券どうするのですかという人がいっぱい出てこられたとき困るのでないかと思うのだ。何となくイメージではわかるのだよ、イメージ的には。山

岸さん、テレビで、僕らはね。

(高木克尚委員長) 渡辺委員がおっしゃったような率直な高校生の意見をどんどん、どんどん我々は集約をして、調査のまとめの中にどう盛り込むかということになっていくのかと思うのです。ですから、今あづま球場2万人ぐらい入るのかね。7試合、14万人分のチケットが存在するわけですけれども、オリンピックはもう商業行為ですから、地元枠なんていう枠があるのかどうかも今のところはわかりませんし、実際値段もわかりませんし、教育の一環として子供たちに見せたいといったときに、そんな枠があるのかどうかさえもわからないがゆえに、そういうことを逆に提言していく必要に結びつくのかなという思いもございますので、当日、今渡辺委員がおっしゃったようなことを我々が聞かれても我々は答えられないですね。そこまでちょっと私も何ともご回答しかねますけれども。

皆さんにご了解いただいた最終的な共通テーマを導く上で前段のテーマなので、ぜひごつくばらんに皆さんからアイデアをいただければと思うのですけれども。

(根本雅昭委員) 先ほど委員長おっしゃられたように、何か今の時代誰でも情報発信できる時代ですので、発信しようオリンピックとか何か、そういう発信関係があると、一人一人が参加意識芽生えるのかなというふうに思うのですけれども、いかがでしょうか。

(村山国子委員) オリンピックを盛り上げようは、やっぱり小松さんが言ったみたいに、オリンピックとパラリンピックを盛り上げようというふうなのがいいのかなというふうに思いました。オリンピックを盛り上げようというのは、自分たちでできるのですけれども、最初のタイトルの観戦したいというのは、本当にできるのというふうになってしまうので、大きく捉えて、今根本さん、何があるのかなと思っていたら、根本さんが今発信しようというふうに言ったので、何かそういうふうなタイトルのほうがいいのかというふうに思いました。やっぱり野球、ソフトボール、福島ではこれなのですけれども、もっと大きく捉えて、オリンピックというふうに捉えたほうがいいのかというふうにちょっと思いました。

(高木克尚委員長) 大変申しわけないのですが、個別テーマ、グループ別テーマですね、これについてきょう正副委員長手元で絞り込みがちょっと困難になってまいりましたので、多分これもう一回皆さんに、お預けすればもっと違うアイデアが出てくるのかなと思いますので、ぜひ宿題も含めて次回までちょっとこの共通テーマを導くためのグループ別テーマについて、ぜひ皆さんからアイデアをいただきたいと思いますので、次回までひとつお考えいただければ。次回は、出そろったところで、これにしましょうねということで皆さんで決めたいと思いますが、よろしいですか。

(高木克尚委員長) では、いつでもお寄せいただければ、事務局と一緒に取りまとめはさせていただきますので、次回まで宿題ではなくて、次回までにアイデアがそろえば、事前にご提出いただければありがたい。

そこで、次回の日程なのですが、10月は非常に立て込んでおりまして、委員長案として10月18日しか見つけられなかったのですが、午前中いかがですか。

【「はい」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) では、次回は、10月18日木曜日午前10時ということでご参集賜りたいと存じます。
正副委員長からは以上ですが、皆さんから何かございますか。

【「なし」と呼ぶ者あり】

(高木克尚委員長) それでは、以上で東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員会を終了いたします。ありがとうございました。

午前11時13分 散 会

東京2020オリンピック・パラリンピック調査特別委員長

高木 克尚